

学校を教材とした住教育

見川美鈴*・山本善積

Housing Education Compared School-space to House

MIKAWA Misuzu, YAMAMOTO Yoshizumi

(Received September 26, 2014)

1. 研究の目的と方法

家庭科の家庭経営、被服、食物、住居、保育といった分野の中でも、住居分野は教えるにくいという声が学校現場の教員にある。2010年に山口県内の中学校家庭科教員にアンケート調査で聞いたところ、他の分野と比べて「取り組みやすい」との回答が7%、「やや取り組みやすい」が12%で肯定的な回答をあわせて19%に対して、「取り組みにくい」が8%、「やや取り組みにくい」が34%で否定的な回答をあわせて42%と多く、「どちらでもない」が34%、不明が5%であった。そして、「取り組みにくい」、「やや取り組みにくい」という回答者にその理由の記述を求めたところ、①各生徒の住居・住環境の差、②生徒自身で改善しにくい問題がある、③掃除以外に生徒の実生活に関わることが少ない、④生徒中心の実習などが無い、⑤適切な教材が乏しい、⑥換気・明るさ等の測定機器が学校にない、⑦生徒の興味・関心が低い、⑧教師に苦手意識がある、教師が住分野について深く学んでいないといった回答がされた¹⁾。また、2006年に島根県の小学校で家庭科を担当している教員にアンケート調査をした結果が報告されている²⁾。この中で、住居分野の指導で困ることの有無を尋ねているが、「ある」という回答が71.6%と多く、困ることの具体的な内容では、「活用しやすい教材の不足」(60.6%)、「実習や演習を取り入れにくい」(49.1%)、「子どもの関心が低い」(37.6%)が多く回答され、他には「住領域の内容が現実的ではない」、「教材が導入できない」などが少数ながら回答された。

住居分野が取り組みにくい理由の1つに挙げられているように、児童・生徒の住居・住環境は非常に多様で差異もあり、みんなの共通理解が得にくいという現実がある。そこで、家庭と学校を置き換えた学習方法が考えられる。学校を教材化することで、生徒の家庭事情に踏み込むことなく住教育ができ、学んだことを学校生活で実践でき、共通認識も得やすいなどのメリットがある³⁾。中学校家庭科では、このような置き換え学習を行っている実践例は多くあった(教室の照度調べ、空気の流れ調べ、動線を考えた教室の配置、校内のバリア探し、校内の安全点検、災害時の避難方法、校内の汚れ調べ、エコ掃除、節水・節電など)。そこで今回は、小学校における住教育の現状とあわせて、学校を教材とした教育活動の状況をつかんでみることにした。

本研究の目的は、小学校における住教育で、学校を教材化する有効性を検討することである。そのために、①小学校における住教育の内容を「学校の教材化」という視点で吟味し、②山口県内の小学校において、学校を教材とした住教育の実施状況や有効性についての質問紙調査を

*島根県教員(非常勤)

行った。質問紙調査は、県内の全公立小学校の家庭科主任を対象として質問紙を郵送し、郵送で回収する方法により行った。実施時期は2013年11月で、対象数は312校、回収数は129校で、回収率は41.3%であった。

2. 小学校住教育における学校の教材化

2011年度からの新学習指導要領に基づいた開隆堂発行教科書「わたしたちの家庭科」、東京書籍発行教科書「新しい家庭」、及び教師用の指導書を「学校の教材化」を視点として吟味した。

(1) 「わたしたちの家庭科」(開隆堂)

「わたしたちの家庭科」では住生活分野は、5年生向けの「4. かたづけよう 身の回り」、
「9. 寒い季節を快適に」、6年生向けの「2. きれいにしよう クリーン大作戦」、
「3. 暑い季節を快適に」の4項目である。この教科書では、児童が取り組む活動を「考えよう」・「調べよう」・「話し合おう」という3種類のマークで示している。これらは児童が学校の授業で行う活動を指示したものであり、「学校の教材化」を考えるヒントになる。

「4. かたづけよう 身の回り」では、生活している場所で整理・整とんが必要なところを調べ、実際に必要な物と必要ではない物に分類し、整とんの仕方も工夫してみることを学習する。教科書では子ども部屋のイラストや机の引き出し、衣服収納など家庭の場が教材に描かれているが、指導書では「最も身近な自分の机の回りから地球環境にまでつながる住まい方の学習の入り口であり、無意識に過ごしていることの多い身の回りに目を向けるようにする」と記載され、「学習のポイント」で「児童の家庭の状況によって差が出やすいので、全員が同じ体験を共有して話し合うことができるように、たとえば学校の教室の机、棚、ロッカー等を使って整理・整とんをするような活動から入るとよい」(p.25)と記されている。

「9. 寒い季節を快適に」では、寒い季節を快適に過ごすための着方や住まい方の工夫を学習する。住生活では日光を取り入れ、換気に注意しながら暖房器具を使用したり、厚手のカーテン、カーペットを利用したりしてあたたかく明るく住まうことを学ぶ。教科書では、住まいであたたかく過ごす方法が例示され、家庭の場が教材になっているようにも見られるが、その前段では、学校内のいろいろな場所(教室の窓側、廊下側など)の明るさや暖かさを調べ、日光との関わりを考えることが示されている。指導書の「学習のポイント」では、「児童たちにとって共通な身近な住まいとなる学校の快適さをじっくり見つめさせ、あたたかさや明るさとの関係に気づかせていく」、「教室を快適にしようという学校での取り組みで達成感や満足感を味わわせ、意欲的な家庭実践へとつなげていくことが必要になる」(p.58)と記されている。

6年生向けの「2. きれいにしよう クリーン大作戦」では、身の回りの汚れの種類や汚れ方を調べ、汚れに合った掃除の仕方を、さらに掃除で出る不用品やごみへの対応を学習する。掃除では、住まいの出入口、居間、台所など家庭の場が教科書に例示されているが、前段の汚れを調べる場所としては学校の昇降口、教室、手洗い場が挙げられ、それぞれの汚れ方を調べて掃除の仕方を考えることが指示されている。指導書では、汚れを調べる場所として、廊下、家庭科室、トイレなども例示され、「学習のポイント」では汚れ調べをする際に、「セロハンテープやルーペで実際に観察する」ことが記されている。これらの汚れ調べをもとに掃除の仕方を考えるので、後段の掃除についても学校内の掃除を児童のグループで計画し実践してみるのがよいだろう。

「3. 暑い季節を快適に」では、涼しい住まい方や着方の工夫を学習する。住生活では昔の住まいの工夫、冷房器具に頼らないで涼しく過ごす工夫、冷房器具の利用の仕方などがテーマ

である。すだれ等で日射を防いだり、風通しをよくしたり、家の回りに水をまくなど、家庭でできることを話し合うよう指示されているが、学校での活動の指示も多い。「調べよう」の項で、教室の窓や戸を閉めた時と開けた時の感じを比べ、それぞれの温度や湿度を測ってみることが記載され、「参考」として、紙テープなどを使って、窓を開けての風通しを調べる方法も記されている。さらに、「参考」として学校で涼しくする工夫が3つ例示されている。①教室の窓の外に緑のカーテンをつくって熱をさえぎる、②校庭に水をまいて、まく前と後の温度を測る、③屋上に植物と土で庭をつくり、屋上からの熱をさえぎるという方法である。指導書でも「教室など共通の場を見つめ、観察したり、実験する」(p.80) ことが指示されている。

以上のように、開隆堂版の教科書では「4. かたづけよう 身の回り」という整理・整とんの項目以外は学校の設備や空間を教材にした活動が示されていて、教科書では指示のない整理・整とんの項目についても、指導書では学校の机、棚、ロッカー等を使ってみんなで実践してみることが指示されている。したがって、4項目とも学校を教材とした活動が組み込まれていると言える。

(2) 「新しい家庭」(東京書籍)

「新しい家庭」での住生活分野は、5年生向けの「4. 物を生かして住みやすく」、6年生向けの「7. 工夫しよう さわやかな生活」、「工夫しよう 暖かな生活」の3項目である。この教科書では、児童が調べたり、話し合ったり、作業したりする事項を「活動」というマークで示しているのも、このマークに注目して学校を教材にした活動を拾ってみる。

「4. 物を生かして住みやすく」では、家庭や学校で使う物を整理し、整とんした上で、場所や汚れに合った掃除をし、さらに整理で出てきた不用品を再利用したり、分別してごみとして出したりするという一連の流れでの整理・整とん、掃除、不用品の処理の手順や方法を学習する。この教科書では、家庭と学校での身の回りの物が併記され、家庭での子ども部屋、玄関、居間の例示とあわせて、学校での道具箱が例示されている。そして、学校の道具箱の中にある物を「使う物」と「使わない物」及び「迷う物」に整理し、道具箱を仕切りで区切り、使う物を置き場所を決めて仕舞うという「活動」が指示されている。掃除でも教室内のごみやほりをセロハンテープを使って調べる「活動」が指示され、掃除の手順と、場所や汚れに合った掃除の方法が学校を教材として示されている。指導書でも、「実際に教室や廊下の掃除を行い、工夫したことや気付いたことを発表しあう」(p.59) と「学習の流れ」に記載されている。このように、学校の道具箱や教室、廊下等の空間を教材として整理・整とん、掃除を実践し、ここで学んだ手順や方法を家庭の机周り、玄関、洗面所などの改善に生かすことも「活動」として示されている。玄関や洗面所などに置く物や置き方が家庭によって違い、家庭らしい住まい方が表れているので、整理・整とん、掃除の仕方も家庭に合った方法で行わねばならないという考え方も示されている。

「7. 工夫しよう さわやかな生活」では、暑い季節を気持ちよく過ごすための衣服の着方や手入れの仕方、住まい方の工夫を学習する。住生活では「緑のカーテン」やすだれによる日射遮蔽、風通しをよくする工夫、小物や水を使った昔からの工夫、室内のしつらえ(インテリア)を涼しげなものにするなど、自分にできる夏の暮らしの工夫を実行し、発表し合う。これらの工夫は、電気やガス、水道などを必要以上に使わない、環境を考えた住まい方として重要なものである。教科書では、夏の住まいと住生活がイラストで分かりやすく描かれ、風通しのよい住まいの様子とあわせて学校につくられた「緑のカーテン」が紹介され、夏を快適に過ご

すために家庭と学校で行っている工夫をみんなで発表しあうことが「活動」として記載されている。「緑のカーテン」以外にも、冷房の使い方や扇風機との併用、学校内で涼しく感じる場所を探してみるなど、学校を教材として快適に過ごす工夫を考えられるようになっている。指導書でも、「夏に自分や家族が行っている暮らし方の工夫や学校で取り組んでいることなどを発表し合う」(p.77)と記されている。しかし、開隆堂版の教科書と比べると、教室の窓を開閉して風通しの違いを感じたり、温度・湿度を測定したりという活動は指示されておらず、学校の空間を涼しくして快適に過ごす工夫の記述も少ない⁴⁾。

「10. 工夫しよう 暖かな生活」では、寒い季節を気持ちよく過ごすための住まい方や衣服の着方の工夫を学習する。住生活では日光の暖かさや明るさを上手に利用する工夫、暖房器具の使い方、照明器具で明るさを調節する方法、暖かさを感じられる室内のしつらえ（インテリア）などがテーマとなる。教科書では、冬の住まいと住生活がイラストで描かれ、夏のイラストと比較して理解できるようになっている。また、家の中で重ね着をして家族が集まって過ごしている様子や厚手のカーテンを閉めて熱が逃げないようにしている様子も示され、冬を快適に過ごすために工夫していることを発表し合う「活動」が指示されている。イラストで夏と冬の住まい方を比較すると、カーテンや布団の色、敷物の有無、こたつや暖房器具の使用、家族が集まって過ごす様子など、児童が季節に合った住まい方について多くのことに気付くことができ、共通理解を得ることもできると思われる。家庭では様々な住まい方があっても、季節に合った住まい方についての共通理解を獲得していく方法として、2つのイラストは効果的である。学校を教材にした活動としては、学校で日光のよく当たる場所はどこか、日光をどのように利用しているかを調べることが「活動」として指示されている。学校内で日当たりのよい場所と悪い場所を探して、その原因を調べ、気温を測って比較するといった活動内容も詳しく記されている。明るさの調節についても、照度計を使って、教室のいろいろな場所の明るさを測ってみることが「活動」として指示されている。これらの活動を通して、カーテンの開閉や照明器具の使い方や明るさを調節することが理解できる。指導書では、窓をチョークの粉の付いた黒板ふきで汚し、照度の変化を見せたり、底を取ったダンボール箱の内側に色紙を貼り、窓に当ててのぞく実験を行うことで壁の色によって明るさが変わることを確かめたり、座布団を干して、重さや温まり方の違いを比べたりすることも紹介されている。こうして、冬の住まい方については、学校を教材にした活動が豊富に示されていると言える。

以上のように、東京書籍版の教科書では学校を教材にした活動が学習の中心に据えられていて、これらの活動で共通認識を得て家庭での実践につなげようとしていると考えられる。教科書に記載されている学校を教材とした活動の数は、開隆堂版が4つに対して、東京書籍版は6つあり、「7. 工夫しよう さわやかな生活」以外は開隆堂版の教科書よりも学校の教材化に工夫していると言える。夏の季節に合った住まい方については、小学校では夏休みの期間が長く、学校を教材化することが難しいという条件はあるだろうが、さらに工夫が望まれる。

住生活分野の配当時間から見ると、整理・整頓、掃除の項目が7時間、季節の変化に合わせた生活（夏）の項目が衣生活とあわせて8時間（住生活は2.5時間程度）、同（冬）の項目が衣生活とあわせて6時間（住生活は4.5時間程度）、合計14時間程度である⁵⁾。衣生活と組み合わせられて、時間も内容も制約されている。

3. 山口県内の小学校における住教育の状況

回答者の中で開隆堂の教科書を使用している者（以下、開隆堂と呼ぶ。）が81人（63%）、東

京書籍を使用している者（以下、東京書籍と呼ぶ。）が48人（37％）であった。アンケートは、①住生活分野全体に関する見方、意識や住情報の入手、②学校を教材とした活動の状況とその評価からなっている。

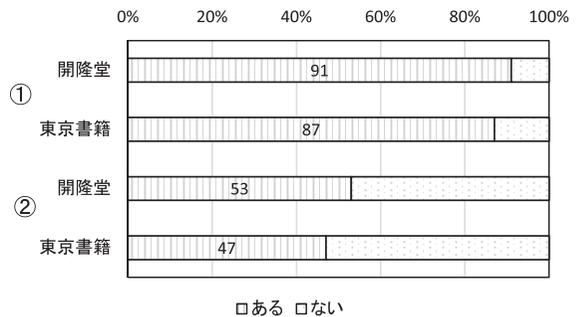
(1) 住生活分野に対する教員の意識・住情報の入手

住生活分野の授業をしていて難しいと感じたことや困ったことがあるかを質問した。開隆堂では50％が、東京書籍では46％が「ある」と回答した。その理由の記述を求めたところ、次のような回答があった。家庭環境に差がある、共通理解が難しい、実践的な活動の場の設定が難しい、教具が揃いにくい、十分な時間が確保できない（衣生活の製作に時間がかかるなど）、家庭での実践につながりにくい、家庭の協力を得にくい、すだれ・縁側など児童にはなじみのないものが多い。これらには解決することが難しい事項もあるが、共通理解を得ることや実践的な活動の場を設定することなど、工夫をすれば解決できることもある。そうすれば「ある」との回答を減らすことができそうである。

住生活分野の授業を行うときに工夫していることがあるかを質問したところ、開隆堂では69％、東京書籍では42％が「ある」と回答した。その内容の記述を求めると、次のような回答があった。学校で実践する、体験的な活動を取り入れる、実物や画像などを教材にしている、使用する道具を工夫した、他教科との関連で時間を確保している、家庭で実践し、保護者からコメントをもらう、家族にインタビューをするなど家庭と連携している、児童の実生活と関連づけるなど。多くの教員がよい工夫をしていることがわかる。

住生活分野で特に力を入れている、または入れたい内容があるかを質問したところ、開隆堂では37％、東京書籍では25％が「ある」と回答した。その内容と理由の記述を求めると、次のような回答があった。力を入れている（入れたい）事項で多かったのは「環境」で、ごみ問題など現代の課題だから、自立に必要な力をつけさせたいから、快適な生活のための知恵など実生活に役立たせたい、環境のために自分にできることを考えさせたいなどの理由が挙げられた。他には「整理・整とん、掃除」が実生活で必要だから、できない児童が多いからという理由を、「住まい」が自然との共存など日本の住まいのよさを教えたい、毎日の生活に関わることだからという理由を、「昔の生活の工夫」が昔の生活の知恵から学ぶことが多いから、今の生活の便利さも感じさせたいからという理由を付して記述されていた。いずれも共感できる。

住情報についても尋ねた。まず、住生活分野の授業を行うときに参考にしてしている資料集や実践集などがあるかを聞いたところ、開隆堂で5％、東京書籍で4％が「ある」と回答したが、ほとんどは「ない」との回答であった。また、家庭科で参加している研修会・研究会があるかを聞いたところ、開隆堂の30％、東京書籍の23％が「ある」と回答した。研修会・研究会には「市教研」、「小教研家庭科部会」、「山口県小学校教育課程研究協議会」などが挙げられた。その他に住情報を得ているものについて選択回答（複数選択）を求めたところ、「ない」と回答したのは開隆堂で22％、東京書籍で27％あったものの、書籍が開隆堂で44％、東京書籍で35％、テレビも同率で、この2つが多かった。これ以外にはインターネット、副読本が10％以上回答された。



*①、②は文中の各事項（①、②）を指す。

図1 整理・整とん、掃除の活動

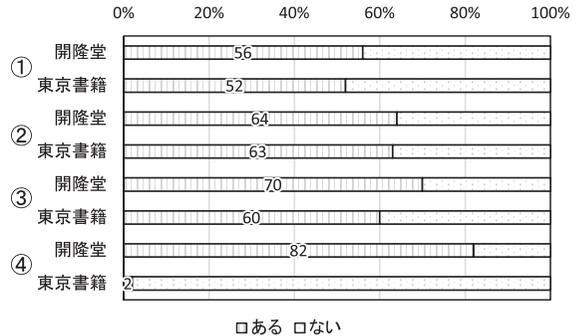
(2) 学校を教材とした活動の状況とその評価

まず、整理・整とん、掃除に関する学校を教材とした活動として、①学校の道具箱や引き出しなどを整理・整とんしたり、教室等を掃除したりすることを授業で行ったことがあるか、②セロハンテープを用いて汚れを調べたことがあるか、開隆堂版の教科書を使っている小学校には、学校のごれウォッチングを行ったことがあるか、も質問した。学校で整理・整とんや掃除を実践してみるという活動は多くで行われていた(図1)。整理・整とんの対象では、道具箱が59%、引き出しが96%、ロッカーが94%、その他20%で、とくに引き出しとロッカーは整理・整とんを実践してみる対象になっていることが分かる。

セロハンテープで学校・教室の汚れを調べる活動は半数程度で行われていた。また、開隆堂の教科書に記載されている「学校のごれウォッチング」を行ったことがあるかという質問には、開隆堂では71%が行ったことがあると回答しており、東京書籍の教科書に記載されている「セロハンテープを用いたよごれ調べ」の実践よりも多い。掃除の実践をした場所では、昇降口(51%)、教室(83%)、手洗い場(63%)が多く回答された。家庭科室(46%)も多く、他には図書室、体育館などが挙げられた。また、掃除の仕方では、掃く(95%)、拭く・こする(98%)がほとんどの学校で行われており、はたく(48%)、吸い取る(32%)も見られた。

季節の変化に合わせた生活(夏)の内容に関わっては、①学校内で涼しい場所を調べたことがあるか、②夏を快適に過ごすために学校内で工夫していることを見つけて発表し合ったことがあるか、③カーテン等の効果について学校で調べたことがあるか、④風通しについて調べたことがあるか(開隆堂の教科書を使っている場合には、窓や戸を開けたときと閉めたときの感じを比べたことがあるか、東京書籍の教科書を使っている場合には、風速計などを使って風通しについて調べたことがあるか)、の4点を質問した。これらの回答結果を図2に示した。学校の状況で活動が左右されると推測されるが、学校内で涼しい場所を調べる、学校内の工夫を見つけて発表し合う、カーテン等の効果を調べるといった項目はいずれも半数以上で取り組まれていた。風通しを調べる活動も、窓や戸の開閉で風通しの違いを感じる活動は多く取り組まれているが、風速計などを使って調べる活動は難しいことがわかる。風通しについては質問の仕方が悪かったので、開隆堂と東京書籍を比較することはできない。

カーテン等、夏の暮らしに使うものの効果については、カーテン、扇風機、打ち水、すだれの順で調べたとの回答が多かった(図3)。すだれは最近では見かけることが少なくなっていて、児童にもわかりにくい教材になっていると思われる。



*①～④は文中の各事項(①～④)を指す。

図2 季節の変化に合わせた生活(夏)

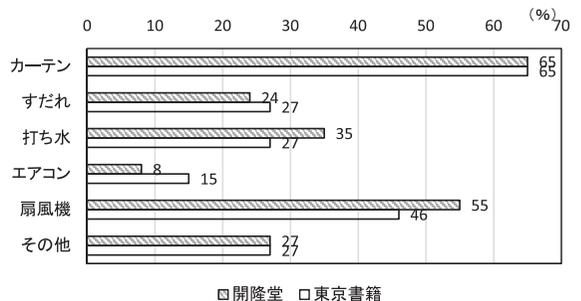
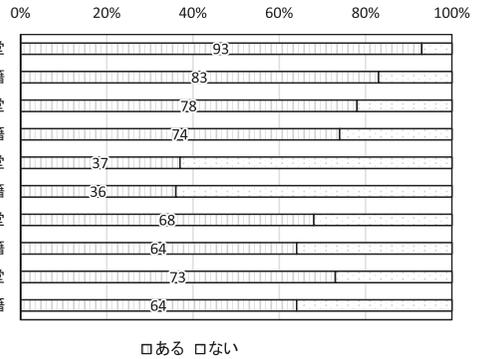


図3 夏の暮らしに使うもの調べ

季節の変化に合わせた生活（冬）の内容に関わっては、①学校内で気温を測ったことがあるか、②日光がよく当たる場所を調べたことがあるか、③日光を利用する工夫（窓の汚れ具合による違いなど）について調べたことがあるか、④照度計を用いて明るさを調べたことがあるか、⑤カーテン等の効果について調べたことがあるか、の5点を質問した。これらの回答結果を図4に示した。③の日光を利用する工夫、窓ガラスを拭いてきれいにするなど効果的なことなどを調べる活動はやや少ないが、その他の活動はよく取り組まれていることが分かる。



*①～⑤は文中の各事項（①～⑤）を指す。

図4 季節の変化に合わせた生活（冬）

また、カーテン等冬の暮らしに使うものの効果については、カーテン、ストーブの回答が多かったものの、それ以外は少なかった（図5）。カーテンは室内の熱を逃がさないために重要なアイテムであり、ストーブも置き場所によって部屋の暖まり方が異なるなど、効果を考え、換気についても考えるきっかけになるもので、重視して取り上げられているようである。

以上のように、小学校家庭科では、学校を教材として取り組まれていることが多いが、その評価について聞いてみた。まず、学校で温度・湿度を測るなど調べるという活動は児童に効果的だと考えるか、を質問した。開隆堂では94%が「効果的だと思う」と回答し、「効果的ではないと思う」は1%、その他は不明であった。東京書籍では79%が「効果的だと思う」と回答し、「効果的ではないと思う」は8%、その他は不明であった。それぞれの理由について記述を求めると、「効果的だと思う」理由には、共通理解をできる、問題意識を共有できる、実践ができ、児童の関心が高まる、家庭で経験したことがない経験もできる、他教科と関連づけられるなどが挙げられた。「効果的ではないと思う」理由には、住宅は木造が多く、学校は特殊な建物だから、家庭生活で生かされないという記述があった。

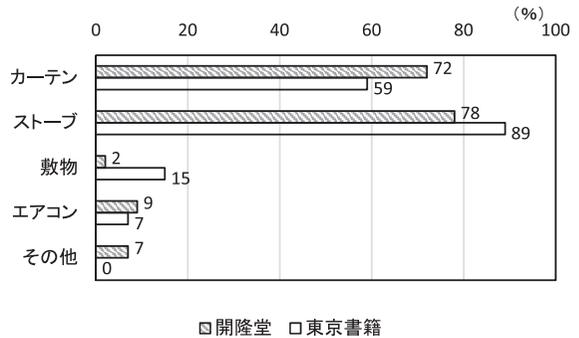


図5 冬の暮らしに使うもの調べ

また、学校で整理・整とんをしたり、掃除をしたりする実践的な活動は効果的か、も質問した。「効果的だと思う」と回答した教員は、開隆堂で95%、東京書籍で94%とどちらも高かった。その理由としては、実践して分かることがある、技能が身につく、実感することができる、教師が直接指導できる、友達と工夫を学び合える、将来に役立つ、家庭での実践に役立つなどが挙げられた。「効果的ではないと思う」理由には、学校で行うだけでは実践力がつかないという記述が見られた。

さらに、住教育で今後やってみたい学習方法や実践的な活動はあるかを聞いた。「ある」との回答は、開隆堂で18%、東京書籍で11%であった。具体的な学習方法や活動には、次のような記述がされた。緑のカーテンで涼しくする、学校全体の暑いところや寒いところを調べる、

涼しくする方法、暖かくする方法を考えて実践する、調べ学習や実践を発表する場をもつ、再生エネルギーとのつながり、効果的な掃除道具の工夫、換気の様子 of 視覚化、家庭科通信を配布し、家庭に実践してほしいことなどを知らせる、学習したことを家庭で実践できる機会を増やすなど。一方では、学校を教材にした活動の充実が、他方では、家庭の実践につなげる工夫が希求されていると見ることが出来る。

4. まとめと考察

小学校の住教育では、教科書にも学校の設備や空間を教材に使った活動が指示されたり、例示されたりしているが、教師用指導書ではさらに多くの記述がされている。ちなみに、学校を教材にした活動は、中学校の教科書でも見られるが、高校の「家庭基礎」、「家庭総合」では記述が見られない。しかし、このことは今後の問題意識に留め、ここでは立ち入らない。

実際にもこれらの活動が学校の授業で取り組まれていた。整理・整とんや掃除は学校での実践率が高く、整理・整とんでは机の引き出し、ロッカー、工具箱が対象にされ、掃除も教室だけでなく、手洗い場、昇降口、家庭科室など、異なった場所での掃除の仕方を学習させようとしていることが伺えた。季節に合った住まい方でも、様々な場所で気温や照度を測定する活動はかなり多くの教員で取り組まれていたが、学校内で涼しい場所を調べる活動や学校での工夫を見つけて発表し合う活動の割合は半数程度にとどまる。これは、夏休みの時期に当たることにもよるだろうが、冬の住まい方に比べて、夏の住まい方での学校を教材とした活動の実施率はやや低い。学校を教材とした活動が効果的であると大多数から評価されたことからしても、今後の課題と言える。また、学校での測定をできるように、どこの学校にも温度・湿度計や照度計を備え、さらには風速計や二酸化炭素検知器なども備えていくことが望まれる。

謝辞

調査に際しては、山口県教育委員会義務教育課指導主事の家庭科担当の先生、各附属学校の家庭科の先生方にたいへんお世話になりました。また、ご協力いただきました公立小学校の家庭科主任の先生方にも記して謝意を表します。

注

- 1) 間地絢子・村上友理・山本善積、「住教育ガイドライン」の中学校での活用法、山口大学教育学部研究論叢第61巻第3部、2011年、pp.377-388
- 2) 正岡さち・小谷智恵・亀崎美苗・田中宏子、島根県の小学校家庭科における住教育の実態と課題、島根大学教育学部紀要第46巻、2012年、pp.53-60
- 3) 前掲、「住教育ガイドライン」の中学校での活用法、p.387
- 4) 教師用指導書では「教室の窓で実際に工夫してみるとよい」(p.82)と記述されているので、風通しを良くする工夫を学校で調べようとしていると理解できるが、具体的な記述はない。
- 5) 東京書籍の指導書では「4. 物を生かして住みやすく」の配当時間が全7時間、「7. 工夫しよう さわやかな生活」の配当時間は全8時間で、①夏の暮らしを見つめよう(0.5時間)、③快適な暮らしを実践しよう(2時間)、「10. 工夫しよう 暖かな生活」の配当時間は全6時間で、①冬の暮らしを見つめよう(0.5時間)、②暖かさともるさを工夫しよう(4時間)とされており、これらを合計して算出した。